

ガバナンスを問い直した後に

——政治学の立場から

三 浦 ま り

上智大学の三浦まりです。きょうは合評会にお招きくださいまして、どうもありがとうございます。社研の6年間にわたる全所的プロジェクトが完成して、このような立派な本を頂戴しましたので、必死になって読みました。さまざまな社会科学の分野が集まったの学際的なプロジェクトで、ガバナンスという概念を根本的なところから問い直し、また歴史的にも振り返る貴重な貢献をなし得た本ではないかと、読み終えての感想を持っています。

今日は「ガバナンスを問い直した後」についてお話しします。ガバナンスに関しては決定本ではないかと言えるぐらいのさまざまな問い直しがありましたので、欲張って、ガバナンスを問い直した後のことを考えたい、そういった意味を込め、このようなタイトルを付けています。

この本を私は通読して、いろいろなことを勉強することができました。私自身はガバナンス論に取り組んでこなかったもので、少し距離感を置いたところからこの本を読みました。

大沢先生も最後のほうで何度か繰り返し言及していましたが、ガバナンス概念を脱構築することに成功していると思います。ガバナンス論の流行から1周遅れてプロジェクトを開始しているという自覚を持たれているので、今までのガバナンス論を脱構築して限界を乗り越えるようなプロジェクトになっていると思いました。

とりわけ「ガバナンス状況」という概念を用いて、通常の「ガバメントからガバナンスへ」という捉え方をしない点は鋭い指摘だと思いました。かつてガバナンス状況はあり、恐らく常にガバナンス状況というものはあるのでしょう。「ガバメントからガバナンスへ」といったときには、ある種ヒエラルキー的な捉え方から水平的な調整へという単純化した二分法であったのに対し、「ガバナンス状況」として考えると、常に「ガバナンス状況」はあるし、常に権力性であるとか、ヒエラルキーといったものはある。それと同時に常に参加や協働、調整といったこともあるという理解になります。さまざまなガバナンスモー

ドが同時並行的に存在するのだという分析視角を見事に提示していると思いました。

私には「ガバナンス状況」と「ガバナンスモード」という概念が腑に落ちて、ガバナンス状況はたぶん宇野さんが使われて、ガバナンスモードは平島先生のところで展開されていたのかと思います。その意味で、第1巻の第1部はプロジェクトの要になるような重要な概念が提示されていて、非常にしっくりくるものでした。

ところが索引には、ガバナンス状況もガバナンスモードも載っていませんでした。編者の先生が索引を作られたのでしょうか。私がこの本を読んで重要だと思った言葉が意外と拾われていなくて、協働という言葉も1箇所でしか拾われていませんでした。プロジェクトの方々の問題意識と、私のように少し距離のあるところから読んだ人間が受け取るメッセージの間に、ずれは当然生じるわけですが、私からするとこういった概念を提示したことが大きく評価されるべきではないかと思いました。

一方で、やや分かりにくかった点は、今回のこのプロジェクトは3つのセクションに分かれていて、それが2冊の本にまとめられていることです。この構成がなかなか頭に入らなかったことがあります。3つのセクションがあり、プラス、後で災害が加わっているので4つのセクションになるわけです。それが最終的に本にする段階で再構成され、ある種の統一性はあるといえはるのですが、通読したときに出てくる大きな物語は何だったのかというのは、いまだ私自身、正直つかめていないところがあります。

今までの全所的プロジェクトで私が思い出すのは、やはり『現代日本社会論』です。大沢先生は高校時代に社研の本を読まれたというエピソードを書かれていましたが、私は社研にいたときに『現代日本社会論』を頂戴しましたが、私の研究室に今でも本棚の上のほうに大事に置いてあります。これは画期的な研究成果だったと思います。会社主義という概念を抽出したことにより、まだその当時は学会全体でつかみきれていなかった日本の福祉レジーム、あるいは労使関係やコーポレートガバナンスを含む日本社会の特徴を見事に描き出した労作ではなかったのかと思います。

この延長線上に社研の全所的プロジェクトが展開されてきて、今回の『ガバナンスを問い直す』もそうだと理解していますが、今までのプロジェクトと少し違うなと感じたのは、非常にメタな分析だという点です。ガバナンスという概念を問い直そうとしているので、日本社会のサブスタンスというか、今の日本社会が抱えている問題により肉薄していこうというより、何かそこから一步引いた中でガバナンスを問い直そうとしているところが、今までの社研のプロジェクトとは切り口が少し違っている。その切り口の良いところと悪いところ、両方あると思うのですが、そのように思いました。

編者の佐藤先生もあとがきの中で、このガバナンス研究を通じて、21世紀の課題に応えるシステムの構築ということを意識なさっていたと述べられていました。その21世紀

の課題とは何なのかということは、個別の章ではいろいろと論じられているのですが、それらはミクロな課題です。全体を通じては、プロジェクトとして21世紀の、日本に限定するかどうか分かりませんが、21世紀のわれわれが抱える課題というものを共有した上で、その課題のためにはこういったガバナンスが必要だという論理展開には、どうやらなっていない。なっていないがゆえに、ガバナンス概念が非常に柔軟に使われていて、だからこそ広い研究を扱えたというメリットがある一方で、もう一步踏み込んでもよかったです。ではないかというのが、最後まで読んで感じた点です。

なぜ、あえてそんなことを言うのかというと、2冊の書物を通じて、半分ぐらいの章は再生産の危機に関わる問題を扱っていました。武田さんの論文は真正面にそれを捉えているわけですが、企業が持続的に経営を成功させることもある意味再生産ということで捉えることができます。つまり、資本主義のシステムの再生産あるいは持続性の危機ということをもう少し正面に据えた上で、それを可能にするようなガバナンスとは何なのかという形で問題をたてることがあってもよかったですのかと思った次第です。

このプロジェクトの中で3つないし4つのセクションがまとめられているわけですが、1つ気になった点は2つの視座を持つことの意味です。私が名前を付けるとすると、システム論的ガバナンスと統治論的ガバナンスということになります。

統治論的ガバナンスはなじみのあるガバナンス論で、グッドガバナンスに向けてガバナンスを設計していくような視点ということになろうかと思います。公共財や公共善を供給するとか、システムの存続を目的とするとか、そういったものが統治論的ガバナンスでよく扱われている論点ですが、今回のプロジェクトの独自な点は、むしろシステム論的ガバナンスを扱っていることです。

システム論的ガバナンスは、果たしてガバナンスという言葉をあえて使わなくても、「システム」という言葉で分析できるのではないか。その辺りはまだ私の中でも消化していませんが、システム論的ガバナンスを取り扱っている章と統治論的ガバナンスで見ている章とでは、やはり視点というか、視座にずれがあります。そのずれはどのぐらいプロジェクトの中で意識されていたのかは、読んでいて気になりました。

恐らく、そのずれはおもしろいずれであり、もっと共有する中で交差させたり、あるいは統合させたりということができたのではないかと思います。システム論的ガバナンスは、大沢先生のガバナンスの定義の中で「効果の総体」という使われ方をしていたところに象徴的に表れていると思いますが、経済学的な発想に基づいています。他方、統治論的ガバナンスは、政治学や経営学の人によりなじみが深いものの見方だと思います。後でもう少し詳しく話しますが、両者の視座は十分にかみ合っていくはずなので、もっとそれを意識したらおもしろかったかのではないかと思います。

少し各論に入っていくと、再生産に関して扱っていたものが多かった点がこの本をおもしろく読むことができたひとつの理由だと思います。私自身の問題意識にやや引きつけながら読んでしまったからなのかもしれませんが、実際に半分ぐらいの章がこの問題を扱っていたと思います。不破論文、安部論文、朴論文、佐々木論文、大瀧論文、南雲・中村論文、今井論文、ノーブル論文、スティーラー論文が、私の中では全部有機的につながっていて、再生産の不安に対し何らかの形で答えようとしていた、そういった研究ではなかったのかと思います。

大沢先生も、ジェンダーあるいは生活保障といったものがガバナンスの主題として中心に据えられたことが、このプロジェクトとしては非常に意義があったということを書かれていて、もちろんそのとおりでと思うのですが、もっとセンターに出てもいいかなというのが私自身の捉え方になります。

その意味で、武田論文は本当にすばらしい論考だったと思うのですが、「統治性」という概念を使いながら、見事に日本の現在の再生産の危機を読み解いたものだったと思います。統治性の話は、武田さんの論文はそれが主題とされているものなので、そこでは使われているのですが、それ以外の論文では残念ながら言及がありません。もちろん、まとめなどでは出てくるわけですが、ほかの章では特に立ち入ってはなかったかと思います。安部さんだったか、不破さんの論文にも少し言及はあったかもしれませんが、それほどは共有されていなかったと思います。しかし、大瀧さんの論文や不破さんの論文も、恐らく武田論文と問題意識を共有して分析を深めることができたのではないかと思います。

大瀧先生の論文は、システム論的な視座に基づいて書かれているわけですが、その結果として専制資本主義の到来ということを批判的に分析されていて、大きな怒りを感じ取ることができました。そういう非常に情熱的な論文だったと思うのですが、この「効果の総体」はといった「統治性」という観点から見たらどう切り取ることができるのか。統治性が行き詰まったとも読めるし、でも、ひょっとしたら武田さんがおっしゃっているような、統治性が高度に強化された結果として、専制資本主義が到来したというような読み方も恐らくできるのだろうと思ったわけです。

武田さん自身は、統治性の過剰な成功で棄民が生じているという暗い結論を導かれて、私も納得して読みましたが、同じようなテーゼが大瀧論文でも指摘されているので、恐らく統治性ということをキーワードに両者の対話をもっと深められるのではないかと思った次第です。

不破さんの論文も手堅い実証分析で勉強になりましたが、ここではニーズが抑圧されたり、不可視化されていることが述べられていました。まさしくニーズが不可視化されたり、あるいは抑圧されていくことが統治性のメカニズムになっていくわけなので、こちらもど

ちらかというシステム論的な視座に基づいての分析でしたが、統治論的な視座を組み合わせることによって、より分析が深まっていくことができるのではないかと思います。

武田さんの論文に関して1つ質問があるのですが、武田さんの解釈だと日本の統治性の動員といったもの、統治性の高度化といったものは、個人化が迂回されることで達成されます。西洋であれば、個人化が進むことでさらなる隘路にはまっているという話だったのですが、日本では個人化を回避しつつ動員を強化することで乗り切ろうとしている。それが少子化問題に突き当たり、うまくいっていないという話になるのですが、ひょっとしたら日本のようなところは、少子化を解決するためにさらなる動員の強化が可能になるのではないかという気が、読んでいてデストピアとして思い浮かびました。

個人化が日本で進んでいないかということとそうでもなく、何をもって個人化とするかですが、ここでの意味は恐らく自己管理をしていくことでしょう。健康であるとか、健康な母体として健康な子供を産んでいくという自己管理が強要されることは、すでに起きている現実だと思います。そうなってくると、恐らく日本においても日本なりの個人化が進み、さらにそこに商業的な形で、つまり生殖医療に対しほとんど規制がない状況ですから、生殖医療の商業化も進んでいくことで再生産に成功していく。そういう可能性も日本においては残されているかと、読んで背筋が寒くなる思いがしました。

今井論文、ノーブル論文は政治学の論文なので、私としては大変おもしろく読むことができました。ガバメントのガバナンスは意外とやられていなくて、ガバナンス論に移った段階でガバメントの外側へ注目が移ってしまいました。ガバメントに対して新しく出てきたガバナンス概念を持ち込むことにより、どう新しく分析できるのかという問題が意外と取り残されていると思います。その点では今井論文もノーブル論文も、ガバメントを真正面から取り扱った論文だったと思います。

今井さんとノーブルさんとは、イギリスと日本の状況なので対照的なところがありました。今井さんの論文では成功のケースを扱っていました。とりわけ子どもの貧困の削減という意味では、イギリスは一定程度の成功を取めることができたという評価を与えています。それを可能にしたガバナンス改革は何であったのかということが明快な形で分析されています。

なぜ成功できたのかということは細かく見ていく必要があるわけですが、ここから日本への示唆を得るとすると、抽象的な大きな話になりますが、目的の明確化と共有が必要だという教訓が引き出されるのだらうと思います。

他方、ノーブル論文は、日本のケースは成功なのか失敗なのか、どちらともおっしゃっていないのですが、たぶん日本人で日本を研究している人はやや辛めに日本のことを批判して、どちらかという外から見ている方のほうが日本は意外とそんなに悪くないよと

言ってくれることが多いので、ノーブルさんの論文もどちらかという失敗と捉えられがちな財政状況に対し、「財政破綻は起きていないので、そう考えたら成功している」と捉えているように思えました。抑制が利いた分析になっていて、成功なのか失敗なのか、「いや、そのように簡単に言えないことがこの財政問題なのだ」とおっしゃりたいのかと思わなくもないのですが、微妙な分析をなさっているなと思いました。

ただ、財務省ないしは財務大臣はどのぐらい統治能力があったのかという問いに、この評価は関わってくることになるかと思えます。財政破綻を回避しているという解釈をするのであれば、財務省は意外と頑張っている、統治能力があるという話になるし、財政危機を長期にわたり解決できないというのであれば、統治能力がないことになります。分析の角度は少し変わってくるので、どちらの立場なのかお伺いしたいところです。

読んでいて非常に興味深かったのがベテラン議員の存在です。自分の再選利益も顧みず働くベテラン議員がいて、その人たちの存在は意外と大きいと指摘なさっていました。通常、政治学だと、政治家の動機は再選することと昇進することと政策を実現すること、この3つであるとみんな教えられ、ほとんどの場合はそれで説明が可能ですが、どうやら日本のベテラン議員はそうではないのかもしれない。政策実現というところに落とし込むこともできるのかもしれないのですが、消費税を上げることに信念を持つというのは私にはピンとこない話であり、ですから、たぶん動機として政策実現というよりは、どこか違うところにあるのではないかと読んで感じた次第です。

では、何が彼らの動機なのかと考えると、やはりエリートサークルの中での評判を気にしているのではないかと。それはベテラン議員に限らず、官僚であったり、あるいは学者であったり、日本のエリートサークルにいる人たちが、どういう動機でガバナンス状況に入っていく、アクターとして関与しているのかというときに、その中での、インナーサークルの中での評判は、それなりに大きなウエートを占めているだろうと推測できます。

ただし、アメリカで発達したモデルでは、評判は分析的に扱われている訳ではありません。エリートサークルあるいはインナーサークルの中での評判を、アクターの動機に組み込んでモデル化をしていくことが日本研究の中ではできるのではないかと、ノーブルさんの論文を読んで思いました。

今井さんの論文から、目的の明確化と共有が成功の条件であることが教訓として引き出せるのだとすると、日本の場合にはエリートとマスで危機感が共有されていないことが重要なかもしれません。日本の経済状況がそもそもそんなには悪くないことから、大衆が危機を持ってないとノーブルさんは指摘しているわけです。

他方、統治性という概念をここに持つこともできると思います。例えば大瀧論文はメディアを批判し、メディアがコントロールし、日本人、あるいは若者が理解する労働

市場のあり方をゆがめているという話をされていました。多分ノーブル先生は賛同されないと思いますが、日本はメディアのコントロールがしやすい国だとすると、エリートが危機をあおることは十分にできるはずであり、なぜあえてしないのかということのほうが、むしろ問題として引き出されるのではないかと思います。

最後になりますが、この本を通じて、いくつか希望が見えるような、希望学をやっていた社研ならではの希望に向かうような章がありました。読んでいて、例えば朴さんの論文はガバナンス状況によるガバメントを的確に描き出していて、私にはとても参考になった論考でした。多様なアクターの調整の難しさ、その中における文化の問題、文化を共有していくことの重要性を丹念な研究から引き出していた論文だと思います。

また、ステールさんの論文も未来志向であり、多様な市民権と能動的実践という言葉が使われていました。参加や協働を生みだし、さらにそこに民主的な正統性が備わるようなガバナンスのあり方は何かということ、多様な市民権と能動的実践という形で、災害ガバナンスの中から見事にあるべき未来像を提示した論文ではなかったのかと思います。

このような未来を見ていくと、いろいろと日本のガバナンスを鍛え直すということ、やらなければいけないことは多々あると感じるわけですが、他方で、それをやっていく主体はいったいどこから来るのかという不安にも襲われました。とりわけステールさんの論文でもそういう能動的な市民といったものが強調されているのですが、それはどこにいるのだろうかということが、読みながら頭を離れなかったということがあります。

宇野さんの論文では「希望」という言葉を語られていて、希望があることにより、そういった能動的な市民が出てくるのではないかということをおっしゃっているのかと、私は受け止めました。宇野さんの論文は最初のところでもすばらしい論考で通史的にガバナンスの概念を振り返り、かつ非常に読みやすく、とても勉強になりました。

宇野さんは「希望」という言葉が使われていて、私は「希望」と聞いても最初はピンとこなかったのですが、希望の意味を宇野さんは「未来へのコミットメント」と書かれました。そのように言い換えたときには私の中で少しすんなりとくるところがありました。「希望というのは未来へのコミットメントである。未来へコミットメントをすることが希望を持てる状態である」と。

結局、コミットをするような人がいることが重要になってくるわけですが、では、そのコミットメントとは何だろうということが、次に疑問として出てきます。日本語になりにくい言葉であり、これを日本語で日本人がずっと分かる言葉にすると、いったい何なのだろうかという疑問があります。「責任」という言い方をすることもあるかと思うのですが、もっと平たく言うと「がつつり関わる」とか、たぶんそういう言葉なのかと思います。しかし、社会科学の本で「がつつり関わろう」と書けないと思うので、「誠心誠意関わる」とか、

そのような言葉でしょうか。

分かりませんが、この辺りの「コミットしていく」という能動的な動機は、いったい日本の文化からどうやって生まれてくるのか、また育てることができるのか。そのコミットメントする人なくしては、シティズンシップの概念は恐らくは成立し得ないのだろうと思います。

これはガバナンスの研究の中の範ちゆうでは全くないのですが、この長い2冊の本を読み終えた後に、「主体的個人はいったいどこにいるのか」という、とても古典的な問題に私は舞い戻ってしまいました。そこを鍛え直すことなしにして、ガバナンスといったものが民主的な正統性を持つものにはならないのではないかと思うからです。

ということで、ちょうど時間になりましたので、私の話はこれで終わりにしたいと思います。ガバナンスを問い直した後がとても重要だと思っているので、これだけの労作の後のその次として、具体的な日本の抱えるサブスタンスに肉薄したような研究を待ちたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

ガバナンスを問い直した後

『ガバナンスを問い直す』合評会
2016.11.8

上智大学教授 三浦まり

新しい視点，論点

- ガバナンス概念の再設定
- 分析対象としての「ガバナンス状況」
- 複数の「ガバナンス・モード」
 - 操縦：統治性，ヒエラルキー
 - 調整・交渉：調整を可能にするもの（習俗，文化，希望）
 - 参加・協働：民主的正統性
 - 競争：規制国家

2つの視座

- システム論的ガバナンス
 - 機能や効果への関心(効果の総体)
 - 個人のニーズの充足, 抑圧
 - 個別利害の調整 → 資源の配分
- 統治論的ガバナンス
 - 目的と権力主体への関心(統治術)
 - 公共財・共通善の供給あるいは資本主義システムの存続
 - 切り札としての「民主化」

再生産の不安定化

- 大瀧論文
 - 専制資本主義の到来という「効果の総体」: 統治性としてのガバナンスの失敗なのか, 成功の帰結なのか?
- 武田論文
 - ガバナンス(統治性の支配システム)の過剰な成功(「再生産」の困難化は「個人化」に由来しない)
- 不破論文
 - ニーズ抑圧・不可視化のメカニズム

ガバメントのガバナンス

- 今井論文: 成功の要因は?
 - 目的の明確化と共有?
 - 日本への示唆は?
- ノーブル論文: 成功事例なのか失敗事例なのか
 - 危機感のエリート・マス乖離: なぜなのか(大瀧のメディア批判)
 - 行為主体の動機のモデル化: ベテラン議員(評価?)
 - 財務省または財務大臣の統治能力

日本の隘路

- 共通項としての個人の客体化
 - 「個人化」の迂回戦略と自己責任化の共存: 動員の強化=棄民 (武田)
 - 公共空間の商業化: 「公共性」認識の欠落(高村)
 - 受動的な被災者・多様性への配慮の欠如(スティール)
- 「個人化」は進んでいないといえるか?
 - 健康(母体)の自己管理への統制→国家動員の強化(と生殖医療の商業化)で再生産に成功する可能性?

脱却の道は？

- ニーズの充足：表出への働きかけ（不破）
- 多様な行為主体間の調整を可能にする政府の役割（朴，今井）
- 参加・協働を生み出し民主的正統性を備える「政治文化」
 - 希望：未来へのコミットメント（宇野）
 - 多様な市民権と能動的実践（スティール）

- 「主体的個人」という古典的な問題？
- シチズンシップ（対等な権利主体）概念の欠落？それとも「協働」の可能性？その中の権力作用？
- 想像の共同体の分節化？逆説としてのローカル・ガバナンスへの期待
- 目的の共有を可能にするガバナンス
 - 潜在能力アプローチに基づくガバナンス？